

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2015年
No. 50
2015年5月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2015 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

スウェーデンの高校生の性行動と性意識…………… 1	今月のブックガイド…………… 10
性教育の歴史を尋ねる②⑥…………… 7	JASEインフォメーション…………… 11
もっと知りたい男子の性⑦…………… 8	

スウェーデンの高校生の性行動と性意識

東京学芸大学個人研究員 (スウェーデン在住)

中澤 智恵

はじめに

スウェーデンは世界でもっとも男女平等な国の一つとして知られている。そして、先進的に性教育が行われ、若者の性行動もオープンで活発だと考えられている。たしかに統計資料や官公庁資料からはそのように理解できるのだが、筆者はそうした成果がどのような努力によるものなのか、また成功しているように見える影にどのような課題や問題があるのか(あるいはないのか)に関心をもっている。これまで行ってきたジェンダーや性の教育に関する調査研究では、程度の差はあれ、日本と共通する課題を抱えていること、しかしスウェーデンと日本社会では、その「程度の差」が大きいことを明らかにしてきた。

今回、2013年から2014年にかけて、スウェーデンで調査研究に専念する機会を得られたので、大学生と高校生に対する性行動と性意識に関する質問紙調査を実施した。本稿では、その高校生調査の結果を主に報

告したい。スウェーデンの高校生の性行動や性意識は、日本の青少年とどのような点で異なっているのだろうか。

調査概要

筆者は、日本性教育協会による「青少年の全国性行動調査」に1999年実施の第5回から参加し調査結果の分析を行ってきた。その経験をもとに、調査項目の一部をスウェーデン語に翻訳して、日本との比較対照が可能なように調査票を作成した。この翻訳作業には、さまざまな年代のスウェーデン人の協力を得たが、単に言葉を置き換えればよいというものではなく、作業自体がジェンダーや性に関する社会的文化的状況の差異を検討するプロセスとなった。

高校生への調査は、大学生調査以上に対象校の協力を得ることが困難であった。結果としては、A公立高校1校の3年生のみに実施することができた。調査時期は卒業間近の2014年5月下旬である。スウェー

デンでは成人年齢が18歳なので、高校3年生への調査実施に際して保護者の許可は不要で、学校長の許可を得た上で本人の同意があればよいという事情からである^(注)。性にオープンだとされるスウェーデンではあるものの、やはり性教育やこうした調査に対する羞恥心や抵抗感はある。筆者が授業時間割に沿って各教室を訪問し、授業の前後（主にホームルームの時間）に回答を依頼したが、日本での実査時以上に、個々の同意・不同意の意思表示が明確だったことが強く印象に残った。回収できた218票のうち、回答内容から3票を無効票とし、有効回答215票を分析の対象とする。3年生の在籍者数が350人程度ということであるので、回収率としては約6割である。

スウェーデンの結果と比較対照する日本の高校生データとしては、第7回青少年の性行動全国調査（2011年）の高校3年生男女の調査結果を使用する。

回答者の基本的な属性

性別構成は、女子61.9%、男子36.3%、その他0.5%であった。その他の回答がきわめて少なかったため、無回答とその他については本稿の分析からは除外することにする。

スウェーデンの高校は、さまざまな職業科を含め教育内容によって17プログラムあり、対象校でも複数のプログラムが提供されている。自然科学系や人文社会科学系などプログラムによって、在籍生徒の性別構成には大きな偏りが見られる。今回、A校で提供されるすべてのプログラムでまんべんなく協力を依頼したが、調査協力は本人の自由意思であることや、卒業間際で出席が自由であるため欠席が多いなどの理由から、男子の回答が少なくなってしまった。

また、スウェーデンは移民を多く受け入れていて、人口の21.5%が外国的背景（本人が外国生まれか、両親が外国生まれという定義）を有する国であるので、その点を把握しなかったが実際には困難であった。国の統計指標にしたがって、本人がスウェーデン生まれか否か、親がスウェーデン生まれか否かをたずねたところ、外国的背景を有する生徒は30.0%であり、人口比からするとやや高率となっている。

性的オリエンテーションは、異性愛が9割を超えている一方、同性愛、バイセクシュアル、その他、わか

らないという回答があわせて1割近い（表1）。とくに高校生女子に「バイセクシュアル」という回答が4.5%であった。参考までに、スウェーデンの大学生女性では9%であった。

表1 性的オリエンテーション (%)

	同性愛	異性愛	バイセクシュアル	その他	わからない	N
男子	1.3	93.5	2.6	1.3	1.3	78
女子	0.0	90.2	4.5	1.5	3.8	132

N= 基数

性的経験

次に、スウェーデンの高校生の性的経験について、日本の高校生と比較対照しながら述べていこう。スウェーデンの学校制度は、9年の義務教育の後ほとんどの生徒が3年制の高等学校に進学するという点で、日本とほぼ共通している。スウェーデンでは学習プログラム変更や留年などによって19歳も多少いるものの、高校3年生は18歳になる年齢が圧倒的多数で、日瑞（日本とスウェーデン）で同年齢層といえる。

スウェーデンの高校生の性的関心は、男女でほぼ差がなく、高校3年生ではほとんどの者が性に関心を持ったことがある（表は省略、男子93.6%、女子97.6%）。一方、日本では女子の性的関心率が低く、半数程度にとどまっている（男子83.2%、女子53.7%）。

次に、現在の交際相手については、1人いる者が男子25.0%、女子31.3%である（表2）。複数いる者はきわめて少なく、残りは「いないがほしい」「いないがとくに関心がない」に分かれる。この交際状況は、日本と大きな差がない。日本においても、現在交際相手がいる比率は、男子（25.9%）より女子（35.3%）のほうが高い。男女を比較して、女子より男子のほうに「いないがとくに関心がない」という者がスウェーデンには多いが、日本では男女でさほど差が見られな

表2 現在付き合っている相手がいるか (%)

		1人いる	複数いる	いないがほしい	いないが、特にほしくない	N
スウェーデン	男子	25.0	1.3	32.9	40.8	76
	女子	31.3	0.8	37.4	30.5	131
日本	男子	25.9	0.7	40.3	33.1	290
	女子	35.3	0.4	29.8	34.4	459

い。

これまでに交際した経験がない者は、スウェーデンでは男女でほぼ3～4割程度である。つまり交際経験がある者が6～7割ということである。これまでに交際したことがある比率はむしろ日本のほうが少し高く、スウェーデン男女と日本男女の4グループのなかでは、日本の女子生徒がもっとも、これまでに交際したことがある者が多い。

一方、スウェーデンの高校3年生でこれまでに性交経験のある者は、男女とも6割強である(表3)。男女であまり経験率に差がない。経験者のうち、初めて性交を経験した年齢も、男女ともに16.0歳である。現在性交する相手がいる者は、男子約3割、女子約4割であり、女子のほうが多い。複数性交する相手がいる比率は、男子41%、女子31%である。日本の高校生は、交際相手のいる比率とは異なり、スウェーデンに比べて性交経験率はかなり低く、日本では男子でスウェーデンの半分、女子では6割程度の性交経験にとどまっている(表4)。

表3 性交経験の有無 (%)

		あり	なし	N
スウェーデン	男子	61.0	39.0	77
	女子	65.1	34.9	129
日本	男子	28.9	71.1	284
	女子	36.9	63.1	455

表4 現在の性交相手の有無 (%)

		1人いる	複数いる	いない	N
スウェーデン	男子	28.4	4.1	67.6	74
	女子	39.1	3.1	57.8	128
日本	男子	14.2	0.4	85.4	282
	女子	23.8	0.9	75.3	453

性交のイニシアティブ(表5)は、スウェーデンの高校生男女を比べると、男性がイニシアティブをとる傾向がややみられるものの、全体としては「どちらともいえない、自然に」と対等な関係性を示している。

表5 はじめての性交で、どちらから要求したか (%)

		自分から言葉や態度で	相手から言葉や態度で	どちらともいえない。自然に	N
スウェーデン	男子	21.7	13.0	65.2	46
	女子	6.0	21.4	72.6	84
日本	男子	35.0	11.3	53.8	80
	女子	0.0	69.5	30.5	167

日本では女子の消極性がきわだっており、ここにジェンダー関係の違いがみてとれる。

さて、現在の交際と性交経験を比べてみると、スウェーデンの高校生では、つきあっている比率より性交をしている相手がいる比率が高いことに目をひかれる。これは、スウェーデンでは告白をしてから交際を始める、という習慣ないし考え方がほぼないことと関係しているだろう。

日本の感覚では理解しづらいのだが、スウェーデンの若者は好意をもってデートをし、性関係をもったとしても、必ずしもお互いを交際相手と認識するわけではない。なので、今回の回答結果のように、青少年が交際していない間柄で性交をしても、必ずしも問題のある状態とはみなされないのである。

また、複数の性関係があっても、必ずしも「浮気」というわけではない。ただ、いったん、お互いをステディな交際相手と認識し合意したら、一対一の関係に対する規範は日本と同様に、あるいはそれ以上に強いといえるだろう。この点は、性規範の項であらためてとりあげる。

避妊行動

それでは、避妊についてはどうだろうか。スウェーデンの男子の回答者数が少なくなりすぎるため、はっきりしたことが言えないが、いつも避妊しているという回答が女子に比べてかなり低い。

現在性交する相手がいるスウェーデンの女子では、9割を超える者が「いつも避妊している」という回答である(表は省略)。この男女の避妊行動の差は、スウェーデンでは10代の女子にも経口避妊薬が普及しているためだと考えられる。なお日本では、「いつも避妊している」という回答は男子75.6%、女子60.7%であった。

いつも避妊している女子の避妊方法を見ると、ピルが最も多く72.5%、コンドーム35.3%、P-stav(皮下埋め込み型避妊具)11.8%と続く。スウェーデンでは、IUD、膈内リング、皮下埋め込み型避妊具、貼付式避妊など、青少年でも選択できる避妊方法が多様であるが、実際の使用率は高校生段階ではそれほど高くないことがわかる。日本で、コンドームの使用が圧倒的であることと対照的である。

性イメージ

このように、日本に比べて青少年の性行動が活発なスウェーデンであるが、性に対するとらえ方をイメージと規範という観点から見てみよう。

まず、スウェーデンの高校生の性イメージは、日本の高校生に比べてとても肯定的である。本稿には「楽しい—楽しくない」と「きれい—きたない」という2つのイメージを取り上げて、日本とスウェーデンの高校生の回答を男女別に図に示した（図1、図2）。

この図にも明らかであるように、「楽しい」から「楽しくない」まで4段階でどう思うか答えてもらった回答では、もっともはっきりと「楽しい」とする者がスウェーデンでは半数を超えており、「どちらかといえば楽しい」を合わせると、男女とも9割近くになる。男女の回答にはそれほど大きな違いはない。

図1 性イメージ「楽しい—楽しくない」

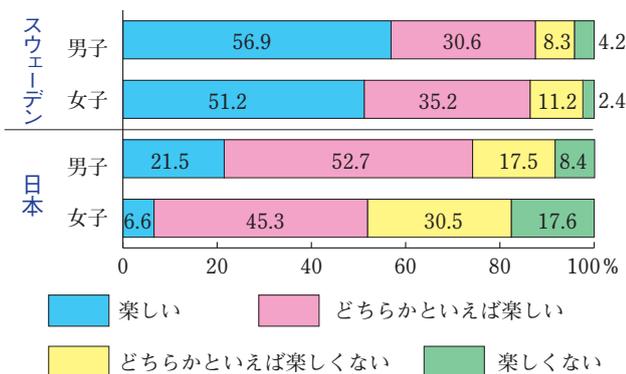
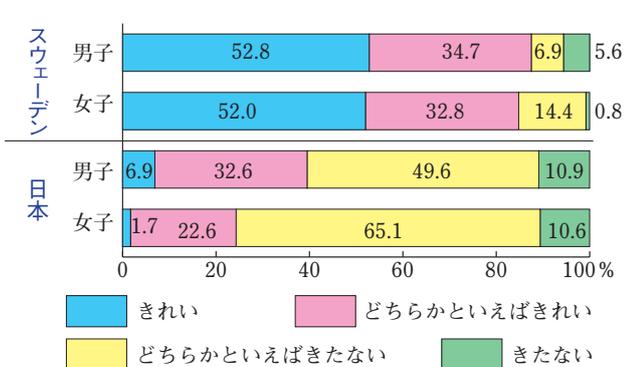


図2 性イメージ「きれい—きたない」



同様に、「きれい」から「きたない」までの4段階の評定でも、スウェーデンでは男女ともに、「きれい」という回答が半数を超えている。スウェーデンではこ

れらの回答に、男女で大きな差がなく、「どちらかといえばきれい」と合わせると9割近くになる。図表には示さなかったが、「恥ずかしい」か「恥ずかしくない」かのイメージでも、恥ずかしくないという回答が多数を占める。

一方、日本の高校生の場合は、4段階のうちもっとも強く肯定する「楽しい」という回答がスウェーデンに比べて格段に少ない。男子では「楽しい」2割強、「どちらかといえば楽しい」5割強で、合わせると約4分の3となるが、女子では、合わせても半数程度にとどまる。日本の女子では「楽しい」という回答は1割にも満たない。

また日本の高校生では「きれい」というイメージは男女とも1割に満たず、「どちらかといえばきれい」を合わせても、男性で4割、女性では4分の1程度にとどまる。性に対してきれいかきたないかといえば、きたないイメージが勝っており、男女で大きな差が見られる。さらに、「恥ずかしい」ものにとらえるイメージも多数を占めていた（図省略）。

このように、スウェーデンの高校生にとって、性は「楽しく」「きれい」「恥ずかしくない」と、肯定的イメージが圧倒的であるのに対し、日本の高校生は全体的に性に対してネガティブなイメージが強い。またスウェーデンに比べて、男女の差が大きいこと、とくに女子に消極的・ネガティブなイメージがめだつことが日本の特徴である。

性規範

次に、性に関する規範意識について見ていきたい。ここでは、「愛情がなくても性交すること」「知り合っただけの相手と性交すること」「付き合っている人のいる人が、その相手以外の人と性交すること」「お金や物をもらったりあげたりして性交すること」の4点を取りあげる（図には「愛情のない性交」と「交際相手以外との性交」の結果を示した）（図3、図4）。

スウェーデンでは、「愛情のない性交」と「知り合っただけの性交」には抵抗感が薄く、多数が「かまわない」と考えている。しかしながら、恋愛と性交がまったく切り離されてとらえられているかという決してそうではなく、「交際相手以外との性交」については、多くが「よくない」と考えている。つまり、ス

テキニな関係に入ったら（これには結婚も含まれる）、性関係は1対1であるべきだということである。また、「金銭の授受による性交（買売春）」についても抵抗感が強い。ただし、性イメージとは異なり、男女の回答には差が見られ、男性のほうがやや規範意識が弱い。また規範意識とは別に、スウェーデンに現実には「交際相手以外との性交」や浮気、買売春がないかという決してそうではない。

日本の高校生では、「交際相手以外との性交」や「金銭の授受による性交（買売春）」だけでなく、「愛情のない性交」や「知り合ってすぐの性交」に対する抵抗感も強い。恋愛関係にもとづく1対1の性関係以外は「よくない性交」だとする強い規範意識といえよう。

性情報源

こうした性に対する性規範のあり方や肯定的なイメージは、どのような背景からくるのだろうか。その一因として、青少年が接する性情報源に、日本との違いがみられるのではないかと考えた。そこで、性交と避妊、それぞれの性情報をどこから得ているかを検討してみた（表6）。

高校生の性情報源は、日本でもスウェーデンでも、

図3 愛のない性交の是非

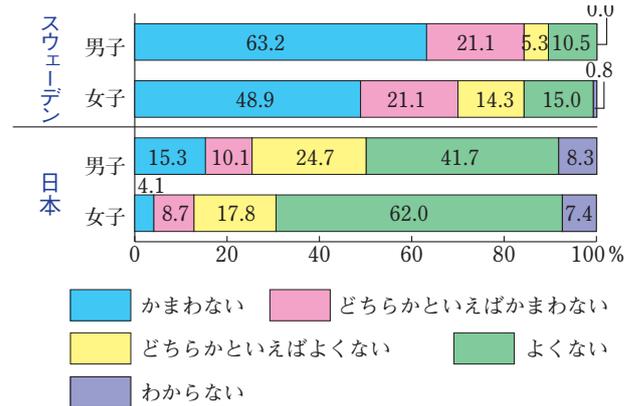


図4 交際相手以外との性交の是非

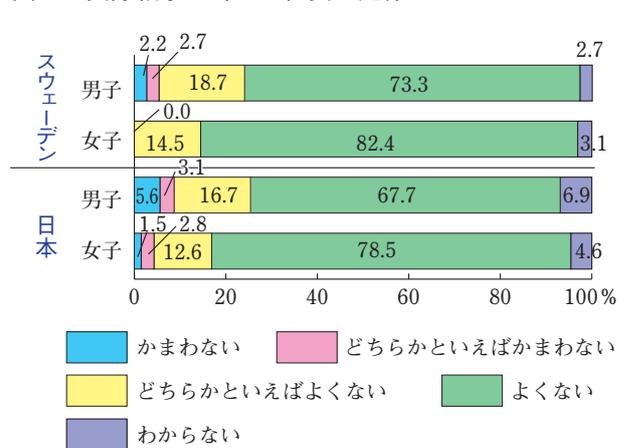


表6 性情報源（性交と避妊）

(%)

	スウェーデン				日本			
	性交		避妊		性交		避妊	
	男子 (N=78)	女子 (N=133)	男子 (N=77)	女子 (N=132)	男子 (N=285)	女子 (N=451)	男子 (N=282)	女子 (N=451)
インターネット	79.5	58.6	71.4	53.0	52.3	27.5	23.8	14.2
学校（先生・授業・教科書）	59.0	52.6	81.8	56.1	28.4	39.2	64.9	69.8
友人・先輩	69.2	85.7	42.9	71.2	70.2	66.1	43.6	41.5
付き合っている人	24.4	36.8	24.7	13.6	9.1	22.4	3.9	16.0
親やきょうだい	23.1	24.1	20.8	35.6	4.9	4.9	4.3	9.8
マンガ・コミックス	5.1	5.3	2.6	0.8	23.2	26.8	9.2	10.0
一般雑誌	10.3	28.6	9.1	16.7	19.6	19.1	12.1	12.0
ポルノ雑誌	3.8	0.0	1.3	0.0	11.6	0.9	5.0	0.2
アダルトビデオ	43.6	5.3	3.9	0.0	19.6	2.9	3.2	0.2
その他	1.3	8.3	3.9	28.0	1.4	1.3	1.1	0.9
とくになし	5.1	2.3	3.9	0.8	8.1	11.1	11.0	7.3

友だち、学校、インターネットが多くを占めている。ただ、回答された比率はスウェーデンのほうが概して高い。さらに、スウェーデンの男子では、避妊情報として友だちが減って、インターネットと学校に比重が高くなり、女子では性交・避妊情報とも、友だちを挙げるものがすこぶる多い。日本では、友だちを性交情報源に、学校を避妊情報源にしているという回答が男女ともにもっとも多い。

他にスウェーデンと日本との違いが見られた点は、1つには、日本は性交・避妊の情報源として「マンガ・コミックス」を挙げる比率がスウェーデンより高いことである。2つには、スウェーデンは、性交や避妊でも情報源として「親やきょうだい」を挙げる比率が日本よりずっと多いことである。10代の青少年の性行動が特別のことでなくなっているスウェーデンでは、単に性に対してオープンであるというだけではなく、親の責任として望まない妊娠を避けるために、とくに女子に避妊について教える家庭の少くないことが推察される。

また、スウェーデンの女子は付き合っている人（多くは異性）を避妊の情報源とせず、むしろ男子のほうが付き合っている人を挙げています。日本では逆に、男子より女子のほうが、付き合っている人を情報源に挙げる比率が高い。これは、スウェーデンの避妊方法として女性がとる経口避妊薬が多く、日本ではコンドームの使用が多いことと関連しているのであろう。

スウェーデンの女子の回答には、「その他」を避妊の情報源として選択する比率がかなり見られたが、これは Ungdomsmottagningen（青少年クリニック・相談センター）を指していると考えられる。回答選択肢を別に設けていたら、この回答はもっと高率となっていたであろう。スウェーデンの青少年はここで助産師に避妊の処方や処置をしてもらい、またさまざまな相談にも乗ってもらうのである。スウェーデンの女子が、男子に比べて学校を頼みにしない傾向がみられるのも、ここがより個人のニーズにあった情報を提供しているためだと推察される。なお参考までに、Ungdomsmottagningen は男子も利用できるのだが低調であり、悩みや問題を抱える男子へのアウトリーチが課題と指摘されている。

ところでスウェーデンでは、インターネットを性情報源とする比率が性交だけではなく避妊についても高

かった。これは、上述した Ungdomsmottagningen や性教育団体が広くインターネット上で性に関する情報提供を行い、インターネット経由の相談活動も行っていることが反映していると考えられる。

まとめにかえて

本稿は、交際経験と性交経験、性意識、性情報源を中心に男女別の結果概要を報告するにとどまっているが、日本の調査結果を参考に比較対照することで、スウェーデンと日本の青少年の特徴の一端を示そうと試みた。スウェーデンでは、日本に比べて性に対して肯定的イメージを持ち、性行動におおらかで、活発なように見えるものの、けっして多くが性に奔放というわけではない。また、交際している間柄での一对一の関係性に対する規範は強い。性意識と行動の両面で、男女間のダブルスタンダード（二重基準）はかなり解消されてきていることもうかがえる。

日本の女子では、交際や性経験に比して性的関心経験は低く、イニシアティブをとることに消極的で、性イメージは否定的であることから、社会におけるジェンダーおよび性のありように課題のあることが示唆される。一方で、近年顕著に示されるようになっている男子の性行動の低下について、多面的な検討が求められる。

青少年の性をサポートすることにつながる情報源や性教育についても、さらなる分析と議論が必要であろう。日瑞ともに、学校、インターネット、友だちが大きな比重を占めるとはいえ、情報の内実には違いが大きいと考えられる。本調査結果に示されているように、性的イメージがこれほど大きく違うことは、私たちの性的健康と生活の質になんらかの影響をもたらしているだろう。

なお本研究は、日本学術振興会平成 25 年度特定国派遣研究者として支援を受けて行った研究成果、および文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（研究代表：岸田泰子）による研究成果の一部に基づいている。

（注）今回の調査対象校は1校であるため、スウェーデン全国に一般化してとらえるには無理があるものの、性交経験率や性交開始年齢については、類似の既存調査とかけ離れてはいない。調査に際しては、スウェーデンの研究倫理審議機関に申請したが、成人に対する匿名の質問紙調査は倫理審査対象には該当しないとの判断であった。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第26回 『男女の交際と礼儀』の作成(その2)

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士(保健学)

前回に引き続き、『男女の交際と礼儀』(以下、本書)が作成された経過をみていきたいと思います。

前々回でも引用したように、『婦人公論』1951年1月号の「原案ができるまで」では、本書の作成に当たって、青年団や教育者、婦人団体・一般社会人など計約700名から、何らかの形で意見の収集を行った旨が述べられていました。本書の起草小委員会のメンバーであった千本木道子も、「小委員会はずまず全国の青少年団と社会教育委員とに依頼しまして、この問題についての意見と要望とを集めたのであります。(中略)青年団約四百五十名、教育者百五十名、婦人団体一般社会人百七十名、学生六十名、省内職員等合わせて約七百名、数は少くありましたが全国から意見をきくことが出来たのであります」と、小委員会が全国から意見収集を行い、これをもとに本書の編集を始めた旨を述べています⁽¹⁾。

この意見収集の最終的な結果を示す資料の存在は確認できていないのですが、「青年団約四百五十名」の回答と思われる中間報告がいくつかの新聞⁽²⁾で記事になっています。『徳島民報』は、これに回答したのは「各層の代表的知的青年」であり、「回答を分類するとつぎのようになる」と結果を報じています。千本木が「全国の青年団その他の団体の指導者へ『問』を送つて、それ等の答によつて基本的なものを作り出そうと計画した」⁽³⁾と述べていることも含めて考えると、調査方法は、①青年団等の団体へ郵送によって質問紙を送付、②右表のような各項目に(おそらく多肢選択式ではなく)自由記述で青年団等の指導者が回答、③その回答を分類して集計結果とする、というものであったと推測できます。

集計結果(右表)からは、本書が作成される以前から、青年団等の指導者のほとんどが、男女交際について、“お互いが人格を尊重する”、“自由であるべき”と考えていたことがうかがえます。興味深いのは、“正当なエチケット・マナーを身につけるべき”という回答よりも、“ぺこぺこお辞儀するのは見苦しく簡

表 男女交際のあり方(青年団等の指導者による回答)

項目	回答	回答数
男女交際について (回答者三八四名)	お互いが人格を尊重し、その上になつた交際であるべき	198
	男女の交際は自由でよい	87
	家庭、学校、職場の交際はよいが、街頭がきっかけになつた男女交際はいけない	18
	男女の自然な交際も世間の目が不自然にしてしまう、白昼の交際がくちやみ交際の交際になるからかえつてまずい(…回答者に農村側が多い)	12
	性教育を十分行う必要がある	8
	異性に対して卑下したりわるびれたりせず、対等に交際すべし(…特に女性の意見と女性に対する注文)	8
	肉親に打明けて交際する気風をつくるべきだ、日本では秘密交際が多く、喫茶店や映画館の交際になる	7
礼と礼儀について (三六一名)	一言毎にぺこぺこお辞儀するのは見苦しい、坐礼でも立礼でも簡素で礼になつたものにすべきだ	203
	相手によつて心のあらわれ方がちがうから時によつて握手、一寸手をあげる、帽子をあげる、おじぎ等でもよいが、正式なおじぎというものを子供のうちから教えこむことが是非必要である	62
	礼法はいかなる文明国も、極めて厳格に行われている、日本が最も混乱して学校でも教えていない、生活環境感情なども考慮して新しい礼式の基準を設けることは大切である	59
	男女の交際で、明朗にして礼式になつた正しいおじぎ、正当なエチケット、マナーを身につけた交際の仕方こそ、現代及将来の教養ある青年のあり方である	18
	一人で時に何種類もおじぎをする(例えば手をあげ、握手、別れきわに軽い軍隊式拳手)が青年によくみる、これはやめた方がよい	3
訪問について (四二八名)	訪問はできるだけ前もつて都合をきき、打合わせをし、時間を厳守すべきである、不意打の場合も時間をよく運び相手に迷惑をかけない、日本人はこの点極めてだらしく、非能率的である	157
	用件は二分で済むのに前置きと結びに一時間もかかる、世間話、雑談、あいさつが長すぎ、多忙な時は迷惑である、能率的に短時間で済ませるのが文明国の礼儀である	101
	異性を訪問した場合、私室に入つてはいけない、日本家屋では閉じこめて二人きりで話してはいけない、外国では極めて厳重であつて、必ず立会人が親がつきそうのが普通である	72
	訪問に手土産がつきものなのは、日本人社会が最も甚だしい、英米では普通手土産などはもたない、虚礼は排すべきである	39
	珍客でもないのに、一寸でも義理がある人、目上の人があると真昼間でも酒さかなを出すのが日本の農村の悪い習慣で、これをやめるべきだ	31
服装 (三三〇名)	客が固辞しているのに飲食物をすすめるのはやめる	24
	清潔、日本人が貧しくとも最も必要で容易にできる世界的礼儀である	112
	頭髮ひげの手入れをもつとまじめであれ、日本人特有の身にかまわないのが男らしいという時代ではない	109
	パンパン文化的服装が主流となつている、泥くさいモダニズムが農村にも横行している、知性あるきちんとした服装に導くよう審美眼を養うべきである	42
	訪問に裸足の洋装は失礼である	26
街頭にて (三二一名)	舞台化粧のようなあくどい化粧は品性を低くし訪問されて迷惑することがある	23
	途中で男女が一对一で出あつた場合くちやみに話しかけたり、喫茶店にさそつたりするのは無礼であり不純である	55
	長い立話雑とうの中でぺこぺこおじぎするのはやめよ	48
	酔つぱらひの多いのは日本が世界一である、これをもつと厳格にすべきだ	47

素にすべき”という回答がかなり多い点です。青少年にマナーやエチケットを身につけさせたいと考える委員にとっては、意外な結果だったかもしれません。

(注)

- (1) 千本木道子「男女の交際と礼儀について」『教育図書ニュース』16号教育図書ニュース社1951年4月p.2
- (2) 『徳島民報』1949年8月17日p.2、『高知日報』1949年8月19日p.2、『長崎民友新聞』1949年8月20日p.2
- (3) 千本木道子「『男女の交際と礼儀』について-委員の一人として」『婦人新報』No.607(1950年12月号)p.8

私はこの連載を通した早乙女先生とのコミュニケーションの中から多くの学びをいただいています。「母子保健の主体とは？」という投げかけに対して、『母子保健』というからには『母』と『子』の両方が主体なのか？」などと考えながら読ませていただくと、こちらが予期していない内容になっていて「なるほど」と感心している自分がいました。

* *

パンダの育児

和歌山県の南紀白浜空港に隣接するアドベンチャーワールドで双子のパンダの赤ちゃんが生まれたと聞き思わず会いに行ってきました。自然界ではパンダの双子が生まれた場合は片方しか育てないようです。しかし、南紀白浜の子パンダは2匹ともすくすくと育っていました。7頭のパンダに会うことが目的だったのでいくつもあるパンダ舎を何度も行ったり来たりしている間、子パンダは遊んだり、寝ていたりしていましたが、その横の部屋にいた母親はずっと仰向けになって、微動だにせず寝ていました。

双子のパンダの育児を紹介したテレビ番組では、飼育員が24時間見守り、栄養がいき渡るよう授乳を交互にさせたり、ストレスが溜まっている母親の食事を笹の葉から竹の茎に変えたり、生活環境を変えたりして元気を取り戻させるなど、素晴らしい育児支援があるからこそ母子がともに元気でいられるのだと教えられました。それに引き換え、イマドキの人間の親たちの育児は孤立しているだけでなく、大変な逆境の中で行わなければならない状況になっています。

* *

母子保健法の目的

「母子保健」という言葉の根拠は「母子保健法」にあります。この法律の目的は「母性並びに乳児及び幼児の健康の保持及び増進を図るため、母子保健に関する原理を明らかにするとともに、母性並びに乳児及び幼児に対する保健指導、健康診査、医療その他の措置

を講じ、もって国民保健の向上に寄与すること」とあります。さらに「母性の尊重」について、「母性は、すべての児童がすこやかに生まれ、かつ、育てられる基盤であることにかんがみ、尊重され、かつ、保護されなければならない」とあります。しかし、残念ながら母性、そして女性が尊重され、かつ、保護される世の中になっているとは思えません。

* *

母子保健の結果が児童虐待増？

自然界の哺乳類の世界では少なくとも授乳中に母子を分離するということはできません。日本では子どもが健やかに生まれ、かつ育つことを母親だけに押し付ける時代ではないことに表向きはなっています。一方で、母子保健法で謳われているように、ちゃんと母性が尊重されていれば、子どもは健やかに生まれ、育つことができるはずですが、相変わらず児童虐待は増え続けています。

では、児童虐待対策が行われていないかと言えばそうではなく、むしろ母子保健の現場は日々虐待対策で忙しく走り回っています。ただ、対策の方向性がずれているため虐待が減らないのではないのでしょうか。

「母子保健の主体とは？」で早乙女先生は「女性が主体的に、自分らしく、生き生きと輝けない社会」になっていると指摘されました。このことは児童虐待が増え続けている原因である、社会に蔓延しているリスクへの対策を求める厳しい指摘でもあります。

* *

予防とリスク対策は別物

2015年3月に国連防災世界会議が東北で開催されたのを覚えておられるでしょうか。陸前高田市で開催された分科会に参加したのをきっかけに、日本と世界の視点の違いだけではなく、日本の様々な施策の問題点に気づかされる機会となりました。

日本語表記では「防災会議」となっていますが、英語表記は「Conference on Disaster Risk Reduction」

でした。「災害を防ぐ」という日本人の視点と「災害のリスクを減らす」という世界の視点の違いは非常に大きな問題ですが、このことに気づいていない人がこれまた非常に多いことに愕然としました。

この会議で取り上げられたリスクの一つが「女性」でした。「えっ?」と思った人と「当然でしょ!」と思った人がいると思いますが、ぜひどちらの方も先月の早乙女先生の原稿を読み直してください。おそらくこの両方で原稿の読み方が異なっているはずです。

* *

リスクを見続ける難しさ

公衆衛生に携わっていると、日本人は病気を予防することばかりを考え、病気になるリスクは何かを考えられないということを痛感させられます。

性感染症（STI）を予防するにはどうすればいいでしょうか。

1. セックスしない。
2. 性教育を徹底する。
3. コンドームを使う。
4. 検査を受ける。
5. 感染している人を治療する。
6. 男女共同参画社会を創り出す。
7. 友達と性の話をする。

上記以外にもいろんな答えがあると思いますが、このような質問をすると、答える側が何に着目しているかがわかります。もちろん一生自分はセックスをしないという人もいるでしょうが、No Sexと言っている多くの人は、STIを他人事として、STIの存在自体を自分自身の世界から排除しています。この場合のリスクは「他人事意識」となります。

教育に視点が行く人は、自分自身が今STIに感染していない理由を検証してみてください。「自分は感染経験があり、それは〇〇についての教育をちゃんと受けていなかったからぜひ他の人には同じ思いをしてもらいたくない」というのであれば非常にリアルなメッセージとなります。しかし、知識がなくて感染した人は本当にHIV/AIDSが出現し始めた初期の人たちだけですし、知識があっても「他人事意識」の人はやはり感染してしまいます。

コンドームを使っても予防ができないSTIもあれば、

コンドームが外れたり、破れたりすることもあります。検査だけでは分からないSTIもあるので、「コンドームを使う」、「検査を受ける」ということはSTIになるリスクを減らすという視点にはなっていますが、STI予防効果は100%ではないのは明白です。

感染している人を治療して、その人たちから感染する人を減らすという発想は最近のHIV診療の現場で繰り返し強調されていることです。しかし、この視点は治療を受ける人の選択肢や権利を無視した「人権侵害」というリスクを生んでいます。

男女共同参画社会の実現とSTIの関係性が見えないという人は、ぜひリスクに着目する必要性について勉強してください。STIには「他人事意識」というリスクが付きまとうため、男性だけではなく、女性も二人の間で行われるセックスについて主体的に考えることができれば、「他人事意識」というリスクを克服することも期待できます。もっとも、「女性が主体的になることを拒否する風潮」というリスクを克服することは容易ではありません。

コミュニケーションを通して「STIは身近だよ」といったやり取りがあれば、コンドームを使ったり、検査を受けに行ったりができるのではないのでしょうか。しかし、昨今、「コミュ障」というリスクが増えている日本で、このリスクを克服できれば、急がば回れのSTI予防対策となるはずですが、これが難しいのです。

* *

すべてにおいて着目したい「リスク」という視点

「犯罪、災害、トラブル、病気をゼロにできるという錯覚」が日本に蔓延している最大のリスクです。日本列島はかつてアジア大陸の一部であったと学校で教えているのに、数百キロも地殻が移動したという事実がある日本列島上に原発をつくることに疑問を感じないのは、教育が間違っているから、教育を受けている国民が賢くないからでしょうか。ここでも「自分だけは大丈夫」という「他人事意識」や「考えることを放棄する癖」というリスクが見えてきます。

「性」の諸問題はとかく他人事意識でとらえられがちですが、この他人事意識というリスクを乗り越えられれば、日本社会に蔓延する他の問題も克服できるのかもしれない……（苦笑）。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド



生活をゆたかにする性教育

障がいのある人たちとつくる
こころとからだの学習

千住真理子著、伊藤修毅編
クリエイツかもがわ
定価 1500 円+税

「快」からはじまる成長と自立

「ダメ」、「あぶない」、「知らなくていい」——毎日のようにこんな言葉をかけられたなら、人生はつまらないものに感じられるだろう。“あなたのため”だと言われても、ちっとも私のためではない。これらはどれも私以外の人の安全と利益を守ろうとする言葉だからだ。「みんなが迷惑する」、「何かあったら困る」、「知らせるとややこしい」こんな言外のメッセージが聞こえてくる。

この3つの言葉は、障がいのある人への教育や支援の現場でもしばしば耳にする。とりわけ性に関する内容については、ある性行動がいかに「ダメ」であるかを教え、それが「あぶない」ことだとわからせる点に教育者の関心が注がれ、さらに「知らなくていい」ことまで踏み込みすぎないように細心の注意が払われる。

事実、障がいのある人の性問題行動や性被害への対応に苦慮している現場は多く、これらの課題にきちんと取り組もうとすればするほど、さらに深刻な問題が浮きぼりになってくる。そのため、とにかくすぐにでも周囲の迷惑や犯罪になるような性行動はやめさせなければならない。出会い系サイトを通じた犯罪に巻き込まれないように守らなければならない。たしかに知識は大切だが、あまり教えすぎるとかえって興味を駆り立ててしまうかもしれない……と必死にならざるをえない。結果、熱心な現場ほど「ダメ」、「あぶない」、「知らなくていい」の言葉が増えてしまう。

しかし、それだけ熱心に取り組んだとしても、人の行動はなかなか変わらないものである。誰でも「わかってはいるけどやめられない」ことがあるし、たとえルールや危険性が理解できたとしても、それに代わる楽しさや居場所がなければ「リスクのある楽しさや居場所」を求めるのも必然である。熱心な現場は無力感

に陥り、性教育をやめるか、より大きな声で「ダメ」と叫ぶようになる。言われたほうも、言うほうも苦痛でいっぱい。これはつらい。

そんな性教育を脱するヒントに溢れているのが、本書『生活をゆたかにする性教育』である。長年、公立学校の障害児学級を受け持ち、障害児学校にも勤めた著者が、他の教員や作業所の職員らと始めた性のセミナーでの実践をもとに書いた性教育の指導案である。教員を退職してから現在は、大阪府内で高等部卒業後の学びの場を立ち上げ、性教育や進路の授業を行うほか、障がいのある中学生や青年、保護者や支援者を対象にした性のセミナーを継続している。

本書をめくって最初に取り上げられているのは、「『快』の体験」である。自分の安全や他者とのよい人間関係の基盤となるのが「快」の感覚であり、それが学びの導入となっている。人が「気持ちいい」と感じるのは、性的な接触だけではない。誰かと一緒に過ごす喜びや楽しさ、あるいは気持ちを受けとめてもらったり、感謝の言葉をかけてもらったときの「こころの快（心地よさ）」そして、手をつないだり、からだを温めたりすることでの「からだの快」を感じることで初めて、「不快」に対する認識が高まっていく。つまり、「『快』の体験」を重ねることが、問題行動や性被害の予防の絶対条件なのだという。

「快」は、成長と自立を促す基盤になる。現場での豊富な経験から作り上げられた教材はどれもわかりやすく、能力や障がいの特性、セクシュアリティ、被害体験などに配慮するための「留意点」も細かく書かれている。性教育の場面のみならずふだんの対応でも役立つものだ。

「ダメ」という言葉を使わなくても性教育はできる。こころとからだの安心感から出発する性教育は、教育者・支援者にとっても快適な教育になるにちがいない。
(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)

▶▶ **5月30日 (土) 14:15 ~ 17:30** ◀◀

第1回 北東北性教育研修セミナー “性の健康と権利”性教育 が伝える人権課題

北東北（青森、秋田、岩手）を拠点として国内外の情報を発信、共有し、次世代の性教育に携わる人材を育成し、地域社会の性に関わる課題に還元することを目的に活動を開始しました。

第1回は当会顧問の大阪府立大学教授 東優子氏をお迎えして、すべての人の性の健康と権利を地域社会の中で達成、維持していくためにはどうすればいいか。「性の健康と権利」というテーマでお話いただきます。

講師 東 優子氏（大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科教授）
WAS（世界性の健康学会）「性の権利委員会」委員、GID（性同一性障害）学会理事、RC-NET 理事、虹色ダイバーシティ理事、関西性教育研修セミナー実行委員会共同代表、北東北性教育研修セミナー顧問。

タイムテーブル 14:15 開会の挨拶 14:20～15:45 東優子氏講演 15:45～16:00 休息
16:00～17:00 ワークショップ（性の健康／権利を私達の街で） 17:00～17:30 フロアディスカッション

会場 青森市男女共同参画プラザ カダール研修室
青森市新町 1-3-7 TEL 017-776-8800 ※会場の問い合わせのみ

参加費・申込み先等

参加費：一般 1,000 円、学生／NPO 関係者 500 円 主催：北東北性教育研修セミナー実行委員会 協賛：日本性教育協会
申込み先：E-mail rc-net@goo.jp 又は青森市安方 1-3-24-2F（セミナー事務局）までお名前・参加費の区分・連絡先を明記してお申込下さい。

▶▶ **6月13日 (土) 13:00 ~ 16:30** ◀◀

平成 27 年度 第4回ピアカウンセリング入門セミナー

内容 ①アイスブレイク、②ピアとは、ピアカウンセリングとは、③ピアカウンセリング8つの誓約、④ピアカウンセリングのスキル、⑤ピアカウンセリング体験、⑥全体振り返り

講師 高村寿子（自治医科大学名誉教授／日本ピア・カウンセリング／ピア・エデュケーション研究会代表）
渡辺純一（井之頭病院教育担当 CNS 科長／日本ピア・カウンセリング／ピア・エデュケーション研究会理事）

会場 飯田橋レインボービル
（東京都新宿区市谷船河原町 11）

主催・問い合わせ等

参加費／5,000 円＋税 定員／50 名。
受講資格／ピアカウンセリングに興味のある保健師、助産師、看護師、養護教諭、看護教諭、教職員等（その他の職種の方の参加希望者は、要事前問い合わせ）
問合せ先／（社）日本家族計画協会 研修課
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 1 - 10 保健会館新館
TEL 03-3269-4785 FAX 03-3267-2658

6
/ 20 (土)
12:00～

第25回 日本性機能学会 中部総会

【プログラム】 ランチョンセミナー「前立腺とセクシュアリティ」永井 敦（川崎医科大学）。教育講演「テストステロンのカー前立腺疾患への影響を含めて」辻村 晃（順天堂大学）。シンポジウム I 「基礎研究のプログレス」宮川 康（大阪大学）・邵 仁哲（明治国際医療大学）、シンポジウム II 「臨床研究のプログレス」鞍作克之（大阪市立大学）・稲元輝生（大阪医科大学）。

【会場】 ハービス PLAZA 6F
（大阪市北区梅田 2-5-25 ハービス OSAKA 6F）

【主催・問い合わせ先等】

事務局／第 25 回日本性機能学会中部総会事務局
大阪医科大学 生殖医学講座泌尿器科学教室内
〒569-8686 大阪府高槻市大学町 2-7
TEL 072-683-1221 FAX 072-684-6546
E-mail jssmc25@adfukuda.jp
参加費／5,000 円、学生 1,000 円

2014年3月 WAS 諮問委員会で承認された改訂版「性の権利宣言」を増補

〔増補版〕『セクシュアル・ヘルスの推進 行動のための提言』

日本語版監修 松本清一・宮原 忍 ◆B5判：72頁、頒価 800円

主な内容 セクシュアル・ヘルスの特徴/セクシュアル・ヘルス上の留意点と問題/セクシュアル・ヘルス増進のための行動と戦略/WASの「性の権利宣言（初版）/WASの「性の権利宣言」（改訂版）
 ※送料：1冊 250円、2冊～7冊 360円、8・9冊 510円、10～12冊 870円、13冊～19冊 1180円、20冊以上無料。



性教育ハンドブック Vol.6

『「ありのままのわたしを生きる」ために』

土肥いつき著 ◆A5判：86頁、頒価 500円



主な内容 港にて（自分史の試み…）/船出のとき（小さなトゲのような思い…）/帆をあげる（教員生活のはじまり…）/舵を切る（「身体改造の」開始…）/嵐の中で/かすかに見えた航路/新たな旅へ

著者プロフィール 1985年より京都府立高校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表、トランスジェンダー生徒交流会世話人、まんまるの会（関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会）世話人代表など。映画『coming out story』に出演。

既刊〈性教育ハンドブック〉

☆性教育ハンドブック Vol.5 『21世紀の課題＝今こそ、エイズを考える』池上千寿子著 A5判・68頁 500円

☆性教育ハンドブック Vol.4 『性教育の歴史を尋ねる～戦前編～』茂木輝順著 A5判・92頁 500円

※送料：1～4冊 180円、5冊～8冊 360円、9冊 510円、10～14冊 870円、15冊～19冊 1180円、20冊以上無料。

◆JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っていません。

【開室日・時間】月～金曜日 10：30～17：30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

全国性教育研究団体連絡協議会



8月3日 (月) 10:00 ~ 16:40

8月4日 (火) 9:30 ~ 16:30



第45回 全国性教育研究大会

第16回九州ブロック性教育研究大会

テーマ

子どもや社会の様々なニーズに対応できる性教育を探る

プログラム

- 1日目**：10:00 ~ 10:30 **開会行事** 挨拶・祝辞・次期開催地挨拶
 10:35 ~ 11:25 **講演** 「性教育のこれからの期待すること (仮題)」 森 良一
 (文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課教科調査官)
 13:10 ~ 14:00 **基調講演** 「学校における性教育の現在とこれから」 石川哲也
 (全国性教育研究団体連絡協議会理事長)
 14:10 ~ 16:40 **記念講演** 「人間の性とは何か」 ミルトン・ダイヤモンド (ハワイ大学教授)
 通訳・東 優子 (大阪府立大学教授)
- 2日目**：9:30 ~ 12:00 **課題別講義** 「学校における性教育の考え方、進め方」「養護教諭に求められる性教育推進の役割」「性教育に生かしたい生殖医学の最新情報」「発達障がいと性に関する指導～具体的事例を通して～」 「性別 (ジェンダー) 承認をめぐる国際社会の動向」
 13:30 ~ 16:30 **分科会** 「小学校における性教育の実践」「中学校における性教育の実践」「高等学校における性教育の実践」「特別支援教育における性教育の実践」「児童養護施設、相談機関における性の課題と対応」

セクシュアリティ講座

- 午 前 「子どもや大人が学ぶ『LGBTフレンドリーな学校・職場』づくり」
 講師：池上千寿子 (前ぶれいす東京代表)
- 午 後 「性の多様性を学び、児童・生徒への支援の在り方を探る」 (市民公開講座を兼ねる)
 講演① 「性同一性障害の基礎知識と医療の実際」
 講師：中塚幹也 (岡山大学大学院教授・GID学会理事長)
 講演② 「性的マイノリティ当事者の生きづらさと今後の課題を考える」
 講師：日高庸晴 (宝塚大学教授)
 講演③ 「セクシュアルマイノリティと法」
 講師：森 あい (LGBT支援法律家ネットワーク・弁護士)

会場 8月3日 (月) くまもと森都心プラザ
 8月4日 (火) くまもと森都心プラザ・くまもと県民交流館「パレア」・アークホテル熊本城前

参加費・問い合わせ先等

参加費／両日参加：一般6,000円、学生2,000円、1日参加：一般3,000円、学生1,000円
 主催／全国性教育研究団体連絡協議会、九州ブロック性教育研究協議会、熊本県性教育研究会
 協賛／日本性教育協会 後援／内閣府、文部科学省、厚生労働省ほか
 問合せ先／メールアドレス：kumaseiken@ina.bbiq.jp (メールのみの受付)
 締切／平成27年7月17日 (これ以降は参加者名簿には記載されません)